

管領細川家臣団各論

「京兆内衆」の構成

細川氏は元来、（斯波、吉良と異なり）足利一族の中では家格が低く、「親類」に過ぎませんでした。

しかし、同じく足利親類の仁木氏、執事の高や赤松、京極、土岐らと同じく武断派として、急成長しました。

特に四国を制圧したことにより、斯波氏にならぶ守護大名となりました。

細川氏は一門で守護職を分け合い、斯波氏守護代の甲斐氏や、畠山氏守護代の遊佐氏のような突出した家臣が現れず、内衆の合議制によって運営されました。

細川家臣は饗庭妙鶴丸（足利尊氏側近）末裔説もある秋庭氏、関東出身の武士（安富、香河、奈良、薬師寺、庄）、阿波小笠原一族（一宮、三好、赤沢）、讃岐綾一族、近藤一族（大平、大西）、伊予出身とおもわれる長塩、寺町、久枝、宇高（高橋）氏らがいます。後に丹波の内藤、上原、波多野が勢力を持つようになります。

長塩氏は楠木正成を討ち取った大森盛長の子孫という説があります。

安富氏は大内家の守護代や肥前国人にもいて、赤松家の浦上氏も同族という説があります。

香河氏は安芸国人として武田家や大内家の家臣となった一族もいます。

内藤氏も細川家と大内家の両方にいます。

薬師寺氏や上原氏は赤松家にもいます（同族かどうかはわかりませんが）。

安富氏や内藤氏らが細川家と大内家の両方に存在する理由は何でしょうか？

安富氏は鎌倉幕府の奉行人（政所公人、鎮西引付二番衆、引付奉行、問注所奉行などに見られる）として活躍しており、南北朝時代にも室町幕府の奉行人（二番引付奉行、石清水八幡宮造営奉行）としての活躍が見られます。

その後、細川家臣及び大内家臣に安富氏が見られますが、両者はかなり近い一族と思われる。すなわち系図では細川頼之家臣・讃岐国守護代の安富盛家の孫が、大内政弘家臣・周防守護代の安富房行とされています。

そして前述のように安富氏は浦上氏とも関係があります。すなわち安富盛家の曾祖父は浦上行義であるとか、浦上則宗の養嗣子が安富氏出身などです。

細川典厩家、上野（細川）氏、一宮（小笠原）氏、内藤氏、安富氏、香河氏、長塩氏、奈良氏、香西氏、上原（物部）氏、秋庭氏、薬師寺氏、寺町氏、大平氏、新開氏あたりが「京兆内衆」というべき存在であると思います。

そのなかでも内藤氏、安富氏、香河氏、長塩氏は継続的に京兆家内衆中枢にいました。

文明期以降には、秋庭氏、薬師寺氏、寺町氏が台頭します。

細川勝元時代（文安四年七月十一日（1447）「『建内記』管領内随分之輩五人」）においては、安富氏、長塩氏、香河氏（当時は十河を「そごう」と呼ぶように「かがう（かごう）」と呼ばれていた模様）の三氏が確実です（残り二氏はのうち一氏は内藤氏と思われる）。

同じく細川勝元時代（文安四年十二月二十四日（1447））に同時に文書が出ている各国守護代は内藤氏（丹波）、香河氏（讃岐西方）、安富氏（讃岐東方）の三氏です。

長塩氏は摂津国守護代であることから、随分之輩五人の残り一氏は土佐国守護代か摂津欠郡守護代のいずれかと思われます。

安富元盛時代（文明五年三月十六日（1473）『細川家年寄衆 安富勘解由左衛門尉筆記』）においては、香河氏、内藤氏、安富氏、薬師寺氏、長塩氏、奈良氏、香西氏、両寺町氏（太郎家と三郎家？）が挙げられています。

同じく安富元盛時代（文明五年三月十六日（1473）「諸大名被官少々交名事 細川殿」）においては、香河氏、安富氏、内藤氏、薬師寺氏、秋庭氏、長塩氏です。

同じく文明期（文明五年？八年？（1473？1476？）「京兆家評定衆」「年寄衆」）においては、安富氏、寺町氏（秋庭氏から養子）、若槻氏（安富氏から養子）、寺町氏、秋庭氏、一宮氏、新開氏（香河氏から養子）、香河氏、内藤氏です（長塩氏脱落？）。

延徳期（延徳三年（1491）「管領内意見人」）においては、細川一門の典厩家と上野氏以外に香河氏、安富氏、薬師寺氏、秋庭氏、寺町氏、上原氏親子、大平氏です（内藤氏から上原氏に交替？、新開氏から大平氏に交替？）。

細川政元の葬儀（永正四年（1507））においては、香河氏、安富氏、内藤氏、寺町氏、薬師寺氏、秋庭氏、長塩氏、香西氏です。

細川讃州家は、細川頼元の兄の家として「下屋形」と呼ばれ、阿波・三河守護になっているほか、澄元が京兆家を継いでいます。

細川典厩家は、細川一族の中でも京兆家に最も近い関係にあり、京兆家の評定を仕切っていて、摂津西成郡の分郡守護になっています。

細川野州家（後に房州家）は、細川一族の有力者で伊予・備中の分郡守護になり、高国が京兆家を継いでいます。

細川遠州家（上野氏）は、細川一族で、伊予の分郡守護や、備後・土佐・丹波の守護代になっています。

一宮氏は、小笠原一族から阿波一宮大宮司の養子となった家系で、丹波や摂津南中島郡（西成郡の一部）の守護代になっています。

内藤氏は、摂津・丹波の守護代になっています。

長塩氏は、摂津の守護代になっています。

安富氏は、四天王の一で讃岐・備後・近江の守護代や新見荘代官になっています。

香河氏は、四天王の一で讃岐・摂津の守護代や足利荘代官になっています。

奈良氏は、四天王の一で摂津の守護代になっています。

香西氏は、四天王の一で丹波・山城・摂津住吉郡の守護代になっています。

秋庭氏は、備中・摂津の守護代になっています。

薬師寺氏は、備後・摂津の守護代になっています。

上原氏は、丹波の守護代になっています。

寺町氏は、摂津東生郡の守護代になっています。

大平氏は、土佐の守護代になっています。

新開氏は、阿波・土佐の守護代になっています。

「右京兆代」と「管領代」について

「管領代」という言葉の定義が難しいです。

畠山義統や細川成之のように三管領の一族が管領代行を勤めるとき、「管領代」という言葉が使われることがあります。

しかし、ここでは細川京兆家が管領を独占するようになった明応政変以降に三管領一族以外の軍事的有力者が副管領のような立場で「管領代」とされることについて取り上げます。

個人的には、管領代行と区別して「准管領」という言葉を使いたいのですが、一応「管領代」で通します。

すなわち細川高国時代の内義興、細川晴元時代の六角定頼、細川氏綱時代の三好長慶についてです。

ただし「管領代」は正式な役職ではなく、三好長慶については「管領代」にはならず実権を握ったなどと言われることがあります。

ところで茨木長隆、波多野秀久、飯尾家兼・秀兼・元兼・元運・公則・為清・為房、斎藤元右・貞船、松田守興などは「右京兆代」とされています。

ここで「右京兆」とは細川右京大夫（京兆家）のことであり、そして細川右京大夫は管領でした。

そのため「右京兆代」＝「管領代」と考えられることもあります。

しかし、彼らは「幕府奉行人」から「管領奉行人」に転身したと言うべきであり、内義興らの「管領代」とは性格が異なると考えているので除外します。

代表的な茨木長隆は守護ではないものの、畿内各国守護代の三好元長、木沢長政、内藤国貞らに対して命令を出しているので判断が難しいです。

波多野・飯尾・斎藤・松田らは「右京兆代」であっても「管領代」ではない、と定義しておきます。

内義興は「管領代」のとき、山城守護となり、自らの家臣の神代貞綱、弘中武長を山城守護代としています。

三好長慶は三好之康、安宅冬康、十河一存、芥川勝長、遊佐長教、内藤（松永）長頼、松永久秀らを守護代的存在として分国に配置して統治しています。

織田信長は入京直後に畠山高政、三好義継、松永久秀、細川藤孝、和田惟政、池田勝正、伊丹親興らを畿内各地に配置しています。

畠山高政・三好義継は「河内半国守護」、和田惟政・池田勝正・伊丹親興は「摂津三守護」と呼ばれていましたが、和田・池田・伊丹が幕府から正式に守護職として任命されたとは考えられず、守護代的存在として捉えるべきではないかと考えます。

織田信長の入京直後の地位は（三好長慶とよく似ていることを考えると）管領不在ながらも「管領代」と呼ぶことができるのではないかと思います（単なる仮説です）。「信長公記」では「准管領」となってます。

「管領代」については六角定頼の解明が鍵になると思います。

細川氏の讃岐支配体制

細川京兆家 讃岐国守護

香河氏 讃岐西方守護代 豊田郡・三野郡・多度郡

安富氏 讃岐東方守護代 三木郡

香西氏 綾南条郡・綾北条郡・香川西郡・香川東郡
奈良氏 那珂郡・鶴足郡（香河氏管轄）
寒川氏 寒川郡・大内郡・小豆島（安富氏管轄）
植田氏 山田郡（安富氏管轄）

波多野氏の丹波支配体制

七頭 久下重氏、長沢義遠、江田行義、大館氏忠、小林重範、荒木氏綱、赤井景遠、
七組 荻野朝道、須知景氏、内藤顕勝、波々伯部光政、足立光永、野尻康長、酒井重貞、
先鋒衆 糺井教業、小野木吉澄、谷重衡、雲林院国住、
老中家 平林秀衡、渋谷忠貞、三田綱氏、渋谷氏秀、荒木氏修、渡辺継俊、
御三人衆 波多野秀香（二階堂伊豆）、宮田豊恒、能勢久基、

可竹軒周聡

細川紀伊守ともいわれる可竹軒周聡は『続応仁後記』『寛政重修諸家譜（伊丹氏）』等で「高畠可竹」と書かれているので、高畠氏であり、長信・長直の父と思われます。高畠氏は小笠原一族で一宮氏との繋がりが考えられます。「細川紀伊守」は上原元秀が名乗る予定だった名前と思われます。

頓宮氏

細川家と赤松家に見られる頓宮氏は鎌倉時代の六波羅評定衆であった内藤右衛門や頓宮肥後守盛氏の子孫と思われます。

安富氏系譜検討

明德三年（1392）に若年と見られる安富安芸又三郎盛衡（1370頃に誕生？）
明德三年（1392）に安富安芸守の「愚息又三郎」とあり、安芸又三郎盛衡は安芸守の子（そもそも「安芸又三郎」と名乗っている時点で間違いはないが）
明德三年（1392）の安富安芸守（署名は盛家と読める）は応永三年（1396）の安富安芸守盛家（1350頃に誕生？）
応永十五年（1408）に備中国新見荘代官の安富入道宝城は盛衡か
応永十六年（1409）の讃岐国守護代の安富安芸入道宛て文書を受けて宝城が小守護代へ文書が出しているので安芸入道と宝城が同一人物
応永二十年（1413）の讃岐国守護代の安富安芸入道は宝城
『顯伝明名録』により宝城と宝密は兄弟
応永二十一年（1414）に宝密とともに登場する「筑後殿」は元衡
応永二十二年（1415）に称光天皇大嘗會の備中国段錢を請けた安富筑後守は宝城の上位者ないし名義上の責任者（朝廷関係なので沙弥の宝城が対応しなかった？）で元衡
応永二十二年（1415）に宝密が亡父の追善和歌
応永二十四年（1417）に宝密が讃州宇多津の亡父盛家と記載
応永二十四年（1417）に宝城とともに登場する紀元衡（1390頃に誕生？）は安富氏で盛衡の子か？
応永二十七年（1420）の讃岐国守護代の安富安芸入道は宝城
応永三十三年（1426）に細川満元死去時の投薬問題で高野山に隠棲した安富入道は新見荘代官であったことから宝城（正長元年（1428）まで活動あり？）
応永三十三年（1426）に備中国惣社宮造営帳で願主となっている安富次郎兵衛尉盛光

永享元年（1429）に備中惣社宮遷宮舞楽の南面棧敷筆頭の安富次郎兵衛尉は盛光
永享二年（1430）頃の安富筑後守は元衡
永享十年（1438）の「筑後守紀元衡」は安富元衡
永享十一年（1439）の讃岐国両守護代の安富筑後守は元衡
嘉吉元年（1441）の安富筑後守は元衡（「連歌」とあるので宝城関係者か）
嘉吉元年（1441）の安富又三郎は又三郎元家（1448誕生）の親
嘉吉二年（1442）の西成郡守護代とみられる安富民部丞盛行は民部丞盛長の親か
嘉吉三年（1443）の安富安芸入道は応永三十三年（1426）に隠棲した安富入道（宝城）とは別人で子か孫
文安四年（1447）十二月二十四日に京兆家の各守護代に一齐に文書が出ていることから安富筑後入道は讃岐東方守護代とみられる
文安五年（1448）の安富新兵衛尉及び元露（元藤と読むか？）は嘉吉元年の安富又三郎か？（又三郎も新兵衛尉も元家と同じ仮名で元家はこの年に誕生）
康正元年（1455）の紀元盛は安富氏
長祿三年（1459）の安富勘解由左衛門は元盛
寛正元年（1460）の安富筑後入道智安（「勝元ノ執権」）と安富山城守盛長（「智安ノ庶流」）と安富左京亮盛保（「智安ノ庶流」）の讃岐東方守護代としての関係は在京守護代・在国守護代・小守護代か？（『讃岐一宮盛衰記』）
文安四年（1447）頃から応仁二年（1468）頃の新見荘代官の安富筑後入道智安は元衡か盛光（元衡の活動期間が長い点に疑義あり）
寛正元年（1465）の安富智侃は元盛で智安の兄弟か
文明十一年（1479）に四十九日を迎えた故人の真福寺殿前筑州太守心菴安公は紀氏嫡流であり、孝孫元家とあることから、安富元家の祖父は安富元衡（筑後入道智安）
長享二年（1488）に安富元家の祖父は安芸左衛門尉

安富氏系図案

盛家（安芸守・筑後守？）
盛衡（安芸又三郎・安芸入道・宝城）盛家の子
元衡（筑後入道智安）盛衡の子？
元盛（勘解由左衛門・智侃）智安の兄弟
盛光（次郎兵衛尉）盛衡の子？

安芸入道（盛衡が嘉吉年間まで存命の可能性も）
安芸左衛門（安芸入道の子？・元家の祖父）

水速（因幡入道）

盛行（民部丞・因幡入道？）
盛長（民部丞・山城）智安の庶流
元綱（民部丞）盛長の子？
盛継（六郎）元綱の弟1452年生？

元藤？（又三郎・新兵衛・元露？）元衡の子？元家の父？
元家（又三郎・新兵衛・筑後守）1448年生・安芸左衛門の孫・元衡の孫
元春（又三郎）元家の子1473年生
元顕（新兵衛）元家の子

元隆（若槻・民部丞）元家の弟・元綱の後継者？
家綱（又次郎・民部丞）

宝密（周防入道）盛家の子・宝城の兄

香河氏系譜検討

「香河元景」という人物が複数（恐らく三人以上）存在しました。
相国寺供養の他の随兵（小笠原成明や安富盛衡）より、香河頼景は（後の）讃岐国守護代と考えられます。
香河五郎次郎和景は元々惣領ではなかったと思われます。

「香河元景」という人物で文書に登場するのは、
一人目は、応永二十五年に香河帯刀左衛門元景及び同二十七年に香河下野守元景が足利荘代官（『鑑阿寺文書』）として見えます。
二人目は、文明十一年（1479.7.18）の香河孫兵衛元景（『賀茂別雷神社文書』）です。
三人目は、天文六年（1537）の香河中務丞元景です。

『西讃府志』では、「景明は、長祿年間には奈良、香西、安富等の諸氏と並んで四天王」、
「景明の子・元景は、在京して管領家の執行」、などと書かれています。
ここの「元景」は恐らく二人目の「元景」であり、
孫兵衛元景（1479）・備中守元景（1487、1491）などと名乗り、
細川政元の重臣として活躍する人物と思われます。
ここで注目すべきことは、
長享二年（1488）斎藤元右文書では「香河孫房、香河五郎次郎、香河六郎左衛門尉」とあり、「孫房」は「五郎次郎」よりも上位に記載されています。
「孫房」が孫兵衛元景と同一人物かどうかについては、確証はありませんが、
同文書の他の人名や、その前後の細川京兆家の重臣の名前を比べれば、
「孫房」は孫兵衛元景のことであると考えられます。

ここで最大の疑問は、『見聞諸家紋』では、香河氏の代表者として、
「孫房」ではなく、香河「五郎次郎」和景が記載されていることです。
ちなみに和景は寛正六年（1465）の文書などに見られる名前であり、
長享二年（1488）の「五郎次郎」は和景の子の満景の可能性もあります（『後鑑』の永正元年（1504）文書の香河五郎次郎満景）。

すなわち『見聞諸家紋』作成時に、「孫房」は未だ幼少であったと思われます。
五郎次郎和景は応仁元年に上洛したと思われます（『編年雜纂』）。
『大乘院寺社雜事記』から考えると、香河惣領家が断絶したと考えられます。
文明十年二月八日（1478）以前に摂津国福原庄（一条兼良の所領）の地頭・香川（香河）新左衛門は「惣領断絶して非分」となっています（『大日本史料』八）。
孫兵衛元景が登場する文明八年頃まで、和景が「陣代」だったのではないのでしょうか。
香河五郎次郎和景と同時に上洛した安富左京亮盛保は安富筑後入道智安の庶流とされている人物です。
細川勝元四天王の安富山城守盛長も安富筑後入道智安の庶流とされることから、香河肥前守景明も庶流と思われます。

香河和景及び香河景明の惣領は安富筑後入道智安と同じく（在京）讃岐守護代である香河上野入道通川やその後継者と見られる香河（信濃守？）之定と推測されます。

香河之定の死去により「惣領断絶」となったと思われます。

香河之定の死去後、一時的に庶流の五郎次郎和景が守護代となり、文明八年頃から孫兵衛元景が登場し、ほぼ同時の五郎次郎が和景ではなく満景と思われることから、和景の子は満景であり、元景は和景よりも惣領に近い出身と思われます。

明応元年（1492）に細川政元主催の宴会に香河備中守と香河五郎次郎（『蔭涼軒日録』）がいます。

相国寺供養の随兵の一人・安富盛衡の父・盛家は1413年頃まで活躍しているため、相国寺供養（1392）当時は若かったと見られます。

よって、香河五郎頼景も若年と推定します。

明德三年（1392）の香河五郎頼景。

応永七年（1400）の讃岐国守護代・香河帯刀左衛門（『菊大路家文書』）は頼景（1370頃に誕生？）のことか？

応永二十四年（1417）の足利庄代官に香河帯刀左衛門。

応永二十四年（1417）に「往攝野州足利之政事」の香河通川居士。

応永二十五年（1418）の足利庄代官に香河帯刀左衛門元景（頼景の改名か？）。

応永二十七年（1420）の足利庄代官に香河下野守元景。

永享二年（1430）の讃岐国守護代・香河下野入道（『善通寺文書』）は元景（1395頃に誕生？）のことか？

永享九年（1437）に通川『聖廟一萬句御法楽』

永享十一年（1439）の讃岐国両守護代・香河上野之助（『二宮記録』）。

文安四年（1447）の讃岐国守護代・香河上野入道（『天龍寺重書目録』）は元景の後継者か？

ちなみに、香河上野介の三男が新開之実（1427～1465）です。

文安六年（1449）の香河上野入道通川（『北野会所連歌始以来発句』）。

文安六年（1449）に三嶋五郎左衛門へ文書を出している香河通川。

宝徳二年（1450）に犬追物の香河信濃守（『後鑑』）。

長祿四年（1460）に三嶋五郎左衛門入道へ文書を出している香河之定は信濃守か？

下野守→上野介→信濃守という承継で、下野守が元景、信濃守が之定ならば、上野介は「之景」か「元定」か「定景」とも考えられ、『西讃府志』「御巡検使内帳」から「之景（行景）」、または川田氏の系図から「信景」かと推定しています。

嘉吉元年（1441）の讃岐国守護代（在国守護代？）・香河修理亮（『仁尾賀茂神社文書』）は下野入道の次の世代で、『全讃史』の「景光」のことか？

文安四年（1447）に仁尾賀茂神社へ神鏡を奉獻している香河景明は在国守護代で修理亮の次の世代か？

長祿年間（1457-1459）の香河肥前守元明は景明の次世代か？

香河肥前守元明は四天王とされますが、同じく四天王の安富山城守盛長も安富筑後入道智安の庶流とされているので（『讃岐一宮盛衰記』）、香河元明も香河上野入道の庶流と思われます。

そして系図では景明と元明の親子関係が逆と思われます。

すなわち「景光－景明－元明－元光－景則」となります。

最後の景則は『香川県史』では「五郎景則」とされているため、この系統がずっと「五郎」であれば頼景の子孫と思われます。

「五郎」家の一族に「山城」家が存在し、最後には「五郎次郎」家の家老となった「山城守元春」が存在します。永正四年（1507）に香河民部少輔景敏は香西元直の所領を与えられました。香河景敏は香河元明の次男です。天正年間には香河民部少輔行景がいます。

寛正六年（1465）の香河五郎次郎和景は、五郎某の次男か、以前より存在した「五郎次郎」家の当主でしょう。

応仁元年（1467）に香河五郎次郎は兵を率いて入京しました（『大日本史料』八ノ一）。

文明六年（1474）の犬追物に登場する香河中務丞（『後鑑』）は和景か？

五郎次郎和景の系統は、五郎次郎・上野介満景（1507戦死）、

永正八年（1511）に香河五郎次郎が天霧城主（『大日本史料』九ノ三）。

中務丞元景（1537、1539頃の人）、五郎次郎之景（1563以降の人）であり、

之景は後に信景と改名し、五郎次郎親和（長宗我部元親の子）を養子にしたとされます。

文明六年（1474）・文明十年（1478）の香河帯刀左衛門は惣領家につながる人物であり、香河美作入道と代官職をめぐって競合しています。

応永二十九年（1422）に香河美作入道道貞が存在（『善通寺文書』）、「美作」家は有力庶流家か。

永正年間（1500頃）に香河平五郎元綱や香河元定らが存在します。

香河美作八郎右衛門元綱は細川高国から長尾為景への使者となります（『上杉家文書』）。

平五郎元綱と美作八郎右衛門元綱は同一人物の可能性がります。

香河元綱は「美作八郎右衛門」の名から文明期の美作入道の後継者と思われます。

大永四年（1524）の摂津中島郡守護代・香河美作守（元綱か？）は、

丹波国守護代・内藤貞正、摂津本郡守護代・薬師寺国長、摂津川辺郡守護代・薬師寺国盛とともに「四守護代」と呼ばれます。

長祿四年（1460）には摂津国守護代に香河之定がいます。

『西讃府志』「御巡検使内帳」によれば「雨霧城主、香川基景、同行景、同年景、四代の末、中務信景落城」とあります。

ここで基景が帯刀左衛門尉元景のことならば、行景が上野入道通川、年景が信濃守か之定のことであり、その四代とは、備中守元景（または五郎次郎和景）、上野介満景、中務丞基景、五郎次郎之景（後の中務丞信景）の可能性も考えられます。

同じ名字で多くの一族がいる場合、受領名のグループが作られることがあります。

①<下野守、上野介、信濃守>グループは、京兆家内衆・讃岐国守護代である香河氏の初期の本宗一族と思われます。

下野守の守護代としての活動、上野介は安富氏と並んで讃岐国守護代と呼ばれ、上野介の子が新開之実（土佐国守護代）、ということが理由です。

信濃守には讃岐国守護代としての活動は見られませんが、上野入道と同じく兵庫代官として三嶋五郎左衛門に指示をしていることから後継者と考えられます。

下って1507年頃、細川澄之に従って戦死した上野介満景がいます。
上野介満景は、新開之実の父の上野介の孫か曾孫世代と思われます。

②<肥前守、肥後守>グループは、上野介の直系かどうかはわかりませんが、軍事的には大きな力を持っていました。

肥前守景明ないし元明が細川四天王とされており、
他の四天王はそれぞれの氏族の本宗と思われることから、上野介の次代に香河氏本宗となったかと思われます。
上野介満景の弟には肥後守がいます。

③<備中守、備前守、美作守>グループは、京兆家内衆のなかでもかなりの有力者です。
備中守元景は、若年と思われる時期から香河氏の代表者として現れており、
香河氏惣領断絶後に香河氏本宗になったと見られることから、傍系からの養子ということも考えられます（或いは嫡孫承継か）。

そうだとすれば、実父は五郎次郎和景かと思われます。
備前守は、備中守元景が讃岐国守護代だった時期の小守護代です。
美作守は、応永年間から活躍が見られるので、早くに分かれた一族かとも思われますが、
美作八郎右衛門元綱は摂津中島郡守護代と推測されることから、
香河氏本宗でないとしてもかなり有力な内衆クラスであったと思われます。

④<山城守、伊賀守、伊勢守>グループは、庶流の一族です。

香河氏本宗について、同一人物の重複を無視して、時系列で並べると、
五郎頼景（1392年頃は若年で随兵）
帯刀左衛門（1400年頃に讃岐国守護代）
帯刀左衛門元景（1417年～1418年に足利庄代官）
下野守元景（1420年に足利庄代官・讃岐国守護代）
下野入道（1430年頃に讃岐国守護代）
上野介（三男が1427年生まれ）
修理亮（1441年頃に讃岐国守護代？）
上野入道（1447年に讃岐国守護代）
肥前守景明（1457年頃に細川四天王）
備中守元景（1479年頃に京兆家内衆）
上野介満景（1507年に戦死）

※香河（香川）氏については「古樹紀之房間」の応答板において、古代氏族研究会の樹童様との応答あり。

<http://shushen.hp.infoseek.co.jp/kejiban/kagawa.htm>